

死語となった舶来品

大津 隆文

最近ほとんど耳にしないが舶来品という言葉が懐かしい。明治大正の上流階級の優雅な生活の香りがする。時計、ウイスキー、装飾品など国産品が外国品にまだ及ばず、輸入品が少なかった時代である。

私の記憶では戦後（終戦が一九四五年だから随分昔だ）しばらくは、とにかく日本中が食べるのに精一杯だった。外貨を稼ぐための輸出品の品質のレベルは低く、安かろう悪かろうなどと揶揄された。日本の主力輸出品の繊維製品がードルブラウスと呼ばれていたとか、外貨が乏しく輸入抑制のため国産品愛用運動が行なわれていたことが思い出される。

思えば遠くへ来たもんだ、である。必死の努力でメイドインジャパンが世界的なブランドとなり、世界を席巻した時代があった。八十年代のアメリカで、ソニー製品を買う時はメイドインUSAではなくメイドインジャパンを選ぶべきと囁かれていた。

国内でも輸入品が日用品を始め飛躍的に増えた。当初は国産かどうか、生産国がどこかを気にしていたが、今や確かめもしない。舶来品が死語となり、品質が良くて安ければ、世界中に輸出でき世界中から輸入できる時代になった。経済のグローバル化のお蔭である。

貿易の自由化、資本取引の自由化により、モノだけでなくカネも世界中を駆け巡る。いい世の中になったものだと思っていたら、最近これに水を差し、逆行する動きが目立っている。

貿易や資本取引を自国の国益のために政策的（一方的）に規制しようという動きである。名分は自国の労働者を守るため、安全保障のため、国民の健康を守るためと様々だ。作用は反作用を呼びエスカレートしていく。国際社会が連携して経済制裁として科す場合は別として、一国、とりわけ大国が独自で行なう規制は問題である。

世界の巨象ともいうべき米国と中国にはとくに自制し、自由を守る先頭に立つ責任感を持つてほしい。この点で中国の日本産海産物輸入禁止、米国の日本製鉄のUSスチール買収案件の取扱いは大いに注目される。